

曹洞宗総合研究センター 第18回学術大会 プログラム

開催日 平成28年11月16日(水)～17日(木)

会 場 曹洞宗檀信徒会館(東京グランドホテル)

第1部会 3階 桜の間

第2部会 3階 蘭の間

第3部会 4階 芙蓉の間

大会日程

1、開会式 11月16日 9:30 桜の間

2、シンポジウム 11月16日 10:00 桜の間

- ◇ 「こころの問題」研究プロジェクトシンポジウム
只管打坐とマインドフルネスとの対話
～ 一仏両祖が目指した坐禅とは ～

11月17日 9:30 桜の間

- ◇ 梅花流詠讃歌研究プロジェクトシンポジウム
『梅花流指導必携』の変遷
～ 梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか ～

3、パネル発表 11月16日 15:00 桜の間

- ◇ 「終活」を考えるー教化と安心をめぐって

4、個人研究発表 11月16日、17日

第1部会 桜の間

第2部会 蘭の間

第3部会 芙蓉の間

第1日(11月16日)2～4頁

第2日(11月17日)5～8頁

第1部会 <桜の間>

シンポジウム (10時～14時30分)

<シンポジウム> 「こころの問題」研究プロジェクト

只管打坐とマインドフルネスとの対話
～ 一仏両祖が目指した坐禅とは ～

シンポジウムの趣旨

曹洞宗の宗旨は、釈尊より歴代の祖師方によって相続されてきた「正伝の仏法」を依りどころとし、坐禅の実践による身と心のやすらぎを行住坐臥の生活に敷衍することにより、さまざまなこころの悩みや不安、恐怖から解放され、「安心」へと導くものであります。

この様に、坐禅をその宗旨の根幹に据えているものの、僧堂における集団での坐禅修行を形骸的に伝えてきたためか、現代の曹洞宗の僧侶は、必ずしも、釈尊、道元禅師、瑩山禅師が目指した坐禅を、一般の人びとに教化敷衍できているとは言い難い状況にあります。すなわち、人びとがどのような思い、悩み、苦悩から、坐禅、更には曹洞宗の教えを求めているのかに向き合った上での、指導、実践、言うなれば、「人びとのこころに向き合う坐禅」を、体現、指導できていないと考えられるのです。

また、仏教における説示の大きな枠組みである、戒・定・慧の三学を例にとれば、仏教はこのうちの定と慧を、「止 (*skt:samatha*)」・「観 (*skt:vipassanā*)」として合わせ説いてきましたが、曹洞宗におきましては、坐禅を「只管打坐」として説く立場から、道元禅師、瑩山禅師の膨大な著述が残されているにもかかわらず、「観」とそれによって得られる「智慧」、「功德」等について、坐禅指導の場で懇切丁寧に説いてこなかったと言えます。これに対して、「止」としての禅定を、「観」、「智慧」と共に、釈尊の説かれた教えとして体系的に説く教えとしてヴィパッサナー瞑想があり、また、グーグル、インテル、フォード自動車、イギリス国会などでも取り入れられ、世界的に注目を集めている自己管理、ストレス軽減法として、マインドフルネスがあります。こうした、ヴィパッサナー瞑想、マインドフルネスに対する関心は、日本国内でも、近年の禅ブームに比しても、非常に高まっていると言えます。

この様な状況に鑑み、本来、釈尊や、道元禅師、瑩山禅師が求め目指した禅とは、どのような教えであったのか、またそうした教えを、現代社会に生かすためには、われわれ曹洞宗僧侶はどの様に取り組んでいくべきか。その様な観点から、ヴィパッサナ一瞑想、マインドフルネスを確認させていただきたいと考えております。

最終的には、曹洞宗の坐禅をどの様に伝えていくべきか、「人びとのこころに向き合う坐禅」とは、どの様なものであるべきかを、協議検討したいと考えております。

司会:センター委託研究員 金子宗元

パネリスト

アルボムツレ・スマナサーラ長老（日本テラーワーダ仏教協会長老）

熊野宏昭先生（早稲田大学人間科学学術院教授・応用脳科学研究所所長）

藤田一照老師（曹洞宗国際センター所長）

パネル発表(15時～16時)

〈パネル発表〉

「終活」を考える ―教化と安心をめぐって

1. 教化としてのエンディングノート 愛知県延命寺住職 阿部雄峰
2. 「終活」と一地方小都市寺院の現状について 山形県館山寺副住職 山口賢明
3. 「終活ブーム」を通して考える現代教化のありかた センター専任研究員 関水博道

個人発表(16時20分～17時)

16:20

1. 赤松月船老師の生涯と梅花流詠讃歌 岡山県大通寺住職 柴口成浩
2. 戦後の曹洞宗の教化方針について センター専任研究員 平子泰弘

第2部会 <蘭の間>

個人発表（14時40分～17時00分）

14:40

1. 三代相論の諸相 - 『瑩峩行実集録』所収の記事をめぐって

駒澤大学大学院 横山龍顯

15:00

2. 普蔵院住番牒と大洞禅院住山記

センター講師 尾崎正善

3. 『伝光録』の区切り方に関する一考察

センター研究員 加藤龍興

4. 『伝光録』にみえる洞山良价伝の一考察

センター専任研究員 小早川浩大

16:00

5. 『坐禅用心記』の定の解釈(四) - 動静二相了然不生を中心として

駒澤大学大学院修了 下條 正

6. 『洞谷記』における看経について

センター専任研究員 石原成明

7. 瑩山禅師と浄土思想(二) - 曇鸞『浄土論註』との比較

センター専任研究員 宮地清彦

第1部会 <桜の間>

シンポジウム (9時30分～12時)

<シンポジウム> 梅花流詠讃歌研究プロジェクト

『梅花流指導必携』の変遷
～ 梅花は曹洞宗の教義にどう位置づけられてきたのか ～

シンポジウムの目的

終戦後間もない昭和21年1月1日、「新日本建設に関する詔書」が発せられ、各仏教教団でもこれに対応する布教方針の転換が開始されました。その延長上に曹洞宗教団では昭和27年に佐々木泰翁新内局により「正法日本建設運動」が宣言されたのです。折しもそれは平和条約が発効され日本の独立が認められた年であり、道元禅師700回大遠忌の年でもありました。この年に産声を上げたのが梅花流でした。

曹洞宗教団に於いては初めての詠讃歌活動による布教運動。これをどのように曹洞宗の教義から意味づけ、また詠讃歌の歌詞によって教義を敷衍してゆくか。その課題に取り組んできた足跡を『梅花流指導必携』の成立とその後の改訂の経緯に見てみようと思います。現行の『梅花流指導必携』は、平成25年に「詠唱編」が改訂第6版第1刷、「解説編」が改訂第4版第1刷となりました。このうち「解説編」を主な対象として、その初版である昭和47年版、またその源流となる梅花流草創期の諸資料を検討することにより、戦後曹洞宗教団の布教活動の一面を照射し、その課題を考察することが本シンポジウムの目的です。

司会：センター専任研究員 関水博道

○『梅花流指導必携』成立の経緯

センター委託研究員 佐藤俊晃

○歌詞解説の諸相

①「三宝御和讃」「正法御和讃」「修証義御和讃」

センター専任研究員 清野宏道

②「『傘松道詠』資料価値の再評価について」「花供養御詠歌(供華)」

センター委託研究員 佐藤俊晃

③「大本山永平寺第一番御詠歌(溪声)」「大本山永平寺第二番御詠歌(溪声替節)」

センター委託研究員 務臺孝尚

○梅花布教の課題

センター専任研究員 関水博道

第1部会 <桜の間>

個人発表(13時~16時40分)

13:00

1. 実践仏教について考える(2) -戦後曹洞宗の死者供養言説について
センター研究生 松葉裕全
2. 仏教講座受講者の供養に対する意識調査
センター研修生 田代浩潤
3. ネット動画による教化活動について
センター研究生 中野孝海

14:00

4. 坐禅と数息観 -生理心理学実験を通して
センター研修生 田中仁秀
5. 坐禅体験を共有する場の必要性について
センター研修生 佐田陸道
6. 坐禅会の現状と運営方法について -運営者の声から見たこと
センター研修生 坂田祐真

15:00

7. 一般初心者に対する坐禅指導法の考察 -具体的な説明方法について
センター副主任研究員 小杉瑞穂
8. 坐禅会・坐禅研修会で活用できる効果的なワークショップの提案
センター専任研究員 宇野全智
9. 匂い袋づくりを通じた新しい「場作り」の提案
センター専任研究員 久保田永俊

16:00

10. 子どもの居場所づくりと教化 -博物館の居場所事業を手掛かりに
東京都薬師寺副住職 浅川範之
11. 短大生の学習態度と仏教教育 -教育に及ぼす作務の意味
育英短期大学 教授 佐藤達全

第2部会 <蘭の間>

個人発表(13時~15時20分)

13:00

1. 道元禪師における天台学受容の諸相 センター専任研究員 清野宏道
2. 本山版『正法眼蔵』の本文成立過程について 駒澤大学大学院 秋津秀彰
3. 『正法眼蔵』「仏道」巻における機関禪について センター特別研究員 清藤久嗣

14:00

4. 道元禪師成仏論と弥勒信仰について 愛知学院大学教養部講師 菅原研州
5. 正信論争考(十三) 一樽林博士の信について(五) 山口県龍昌寺住職 竹林史博
6. 栄西の入滅地について 一『吾妻鏡』の栄西入滅記事を踏まえて
花園大学非常勤講師 館 隆志
7. 「弘戒法儀」と「弘戒指南」との比較考 一黄檗戒壇の曹洞への影響
愛知学院大学名誉教授 吉田道興

15:20

8. 教化研修部門研究部 リレー発表

瑩山撰・峨山編と伝える『報恩録』考究

(1) 研究の回顧と展望

センター研究生 松葉裕全

(2) 依用人物、典籍の検討

センター研究生 中野孝海

(3) 上巻12則「盤山光境俱忘」参究

センター研究生 本多清寛

(4) 抄釈法の課題

駒澤大学総長 池田魯参

第3部会 <芙蓉の間>

個人発表 (13時～16時40分)

13:00

1. 寺族である、ということについて 女性と仏教・関東ネットワーク 瀬野美佐
2. 「性的マイノリティ」と宗教者について ―教化活動の視点から センター研究生 本多清寛
3. 『南国順礼記』を読む センター専任研究員 古山健一

14:00

4. 海外亮天師ゆかりの洞門寺院の今昔 愛知県龍潭寺住職 別府良孝
5. 『金龍山退休禪寺由来記』に見る源翁心昭 駒澤大学仏教経済研究所研究員 上野徳親
6. 「禪苑清規」における維那の職掌 センター研究員 角田隆真

15:00

7. 『大日経疏』における初期禅宗思想について 駒澤大学仏教経済研究所研究員 千葉 正
8. 諏訪山吉祥寺史に関する一考察 センター研究員 澤城邦生
9. 徳巖慶隆の寺院整備事業について 愛知学院大学非常勤講師 伊藤秀真

16:00

10. 宝永年間種月寺支配下寺院本末帳について 新潟県永泉寺住職 深井一成
11. 建綱と建擲の関係(十) ―『建擲記』に登場の義準 岩手県正洞寺住職 熊谷忠興

MEMO

※プログラムは変更になる場合があります。

曹洞宗総合研究センター

〒105-8544 東京都港区芝 2-5-2 曹洞宗宗務庁内

電話 03-3454-7170

